

情報・知識として見る日本近世の「妖怪」

木場貴俊^{†1}

日本近世における「妖怪」について、「情報」あるいは「知識」という視角から考えた場合どのようなことがいえるのか。今回の報告では、発表者がこれまで研究してきた、儒学や本草学など学問上での「妖怪」に関する言説を発信・流通・受容などの面から分析することで、当時の情報・知識のあり方について考えてみたい。

1. はじめに

筆者の専門は日本近世の文化史、中でも近世社会における怪異について、知識人の言説などを用いて研究している。本稿の目的は、近世における「妖怪」を「情報」あるいは「知識」という視角から見てみることである。

そのために本稿で用いる言葉について、便宜的な定義を行っておきたい。まず「妖怪」は、近世のものとは近現代の通俗・学術的領域で使われるものとは意味が異なっている。室町時代後期から江戸時代を通じて、さまざまな諸本が出された辞書『節用集』によれば、「妖怪」は動物に関する言葉として分類されている[1]。またそこに付された解説「化生(の)物なり」から、当時考えられていた生物の発生のうち、化生=無から化成して生み出される物あるいはある物から全く別に生じる物、言い換えれば化け物として理解されていた。化け物と同義で、動物(≠人ではない生物)というのが、「妖怪」の江戸時代における認識であった(以下、「妖怪」はこの意味で用いるため、「」は外す)。

次に「情報」と「知識」について。文化史家ピーター・バークは、情報を「生の」素材、特殊で実際的なもの、知識を「調理された」素材、つまり思考によって処理されたり、体系化されたもの」と便宜上区別しており[2]、本稿でもこの区別を用いることにする(「情報」「知識」についても、以下「」を外して用いる)。ただしバーク自身もこの区別が相対的なものとするように、情報と知識は発信や受容などその立場に応じて位置付けが変わる。

これらを押さえた上で、具体的な事例から検討を行っていくことにしよう。

2. 儒学者林羅山から見る妖怪と情報・知識

近世の妖怪といっても多種多様なため、わかりやすくするために軸を設定することで考察を進めたい。その軸とは、林羅山(1583~1657)である。羅山は、言わずと知れた17世紀の儒学者であり、また徳川幕府のブレーンとしても活躍した。一方で、彼は文芸、神道、本草学など儒学以外のさまざまな学芸分野に関する著述を行っていた。彼の知的営為と妖怪の関係を見ることで、知識や情報の有り様を考

えてみよう。

2.1 『多識編』の謎

羅山の知的営為について、まず『多識編』という著作を取り上げてみたい。これは、明代の李時珍による本草学書『本草綱目』に収録されている漢名に和名を当てた対照辞典である。この辞典の特徴は、形態および内容を時期的に二分できることである。一つは慶長17年(1612)に成立した草稿本(写本『羅浮涉獵抄多識編』)の段階であり、もう一つは寛永7年(1630)の古活字本、それを増補した整版本(1631年刊『新刊多識編』)といった刊本の段階である[a]。これは、「閉鎖系の「知」」の草稿本(写本)から「開放系の「知」」の刊本へと書物のあり方が変化したといえる[3]。

そうした書物としての変化に呼応するかのようには、妖怪に関する語彙も変化している。具体的には、『本草綱目』巻51収録の「怪類」という獣に関する語彙である。その「怪類」に対する和名を比較したのが、表1である。

【本草綱目】 怪類の名称	羅浮涉獵抄多識編 (草稿本)	寛永七年版 (古活字版)	寛永八年版 (整版本)
山都	ヤマノカミ	△	サント
山獐	カセノカミ	△	サンゴン
山鬼	×	△	サンキ
木客	ヤマノオニ ヤマヒコ	×	×
山獐	ヤマノエヤミナスカミ サキチヤウノオニ	やまひこ	やまびこ
山精	ヤマノチホ ヒデリノカミ	△	サンセイ
山丈	ヤマオトコ	やまおとこ	やまおとこ
旱魃	×	ひでりかみ	ひでりかみ
山姑	ヤマウハ	やまうは	やまうぼ
罔両	キモノフオニ イシノカミ	きもくいおに	きもくいおに
彭侯	コタマ キノカミ	こたま	こたま
封	カワノコ カワラウ	かわたらう	かわたらう

原文は、草稿本は片仮名、整版本(古活字本)は変体仮名(音読は片仮名)で表記される。

「×」=載っていない項目

「△」=載っているが和名・音読がないもの

表1 書誌別『多識編』の和名比較

表1を見ると、草稿本では「山都」を「ヤマノカミ」、「罔両」を「イシノカミ」など、「カミ」あるいは「オニ」を用いた和名がよく見られる。しかし、刊本になるとそうした「カミ」や「オニ」の名前がほとんど削除され、漢音のみの表記になってしまっている。

[a] 以下、『多識編』の引用は全て中田祝夫・小林祥次郎編『多識編自筆稿本刊本三種 研究並びに総合索引』(勉誠社, 1977)の影印篇による。

^{†1} 関西学院大学博物館

この変化は、当然羅山の思想が反映した結果である。何がこのような変化をもたらしたのか。各時期の和名の分析から、検討を行ってみる [b] [4]。

2.2 和名をめぐる知の葛藤

草稿本の和名については、羅山が参考にした典拠が分かっている。それは、源順が編纂した百科辞書『和名類聚抄』(931~938年頃成立、以下『和名抄』と略記)である [c]。『和名抄』の名は、既に慶長9年(1604)作成の羅山の読書目録 [d] にも見られる。依拠した部門は鬼神部で、『和名抄』と草稿本『多識編』を比較した表2を見ると、「山神(やまのかみ)」や「瘧鬼(えやみのかみ・おに)」など、羅山が「カミ」「オニ」を修飾するために使った言葉の多くが『和名抄』由来であったことがわかる。

草稿本		和名抄	
漢名	和名	名称	読み
山都	ヤマノカミ	山神	やまのかみ
山彈	カセノカミ	×	×
山猿	ヤマノエヤミナスカミ サキチヤウノオニ	瘧鬼	えやみのかみ・おに
山精	ヤマノチコ ヒテリノカミ	早魁	ひてりのかみ
岡両	キモノフオニ イシノカミ	魁魘	みつは
彭侯	コタマ キノカミ	樹神	こたま

「×」-載っていない項目

表2 草稿本「怪類」と『和名抄』鬼神部の名称比較

ただし注意すべきは、羅山が「怪類」の和名に、羽族部・毛群部・鱗介部・蟲豸部といった『和名抄』の動物に関する部門ではなく、鬼神部の語彙を用いたことである。その理由として、儒学(朱子学)が想定できる。

朱子学で、「鬼神」は生類など万物と同じ「気」という基体から成り立っている、と考えられていた。そうした鬼神の中でも、異常な状態で生じたものを「怪異」と朱子は位置付けている [5]。『本草綱目』自体、朱子学の影響を受けており [6]、「怪類」も異常な鬼神(という自然的なもの≒生類)だといえる。

こうして羅山は、「怪類」を朱子学でいう「怪異」つまり「鬼神」と理解したが故に、『和名抄』鬼神部の語彙を参考にしたと考えられる。また先の『節用集』のように、当時の日本では妖怪を動物として認識していた(羅山も『節用集』を読んでいただ可能性が高い)。これらを踏まえれば、当時の日本の妖怪をめぐる状況は、朱子学の「怪異(怪類)」理解と親和性を持つものだったといえる。草稿本の和名の創出は、これらの状況を混合した結果といえる。

[b] 以下、『多識編』「怪類」の考察は、参考文献 [4] 拙稿 2013 による。
 [c] 『和名抄』は、中田祝夫編『倭名類聚抄 元和三年古活字版二十巻本』(勉誠社、1978)による。
 [d] 『林羅山詩集』附録「羅山林先生年譜」(京都史蹟会編『林羅山詩集』ベリかん社、1979に収録)。

羅山が自身を取り巻く社会・学問的状況を鑑みて創出した草稿本の和名だったが、約20年後の出版段階になって「カミ」や「オニ」の和名は削除されてしまった。何故か。

そこには、羅山が寛永期に体系化した儒家神道「理当地神道」の影響が考えられる。理当地神道で説かれる「神」とは、記紀神話の神に代表される正常かつ清浄な存在(天神地祇)を指す。一方、草稿本で当てられた「カミ」とは、不正の道理で発生した異常な存在である。理当地神道の思想を優先させた結果が、「カミ」や「オニ」の削除だと考える。特に削除された「カミ」が、『和名抄』では「日本紀云」と、『日本書紀』に由来するものに絞られていることから裏付けられる。

要するに、『多識編』の「怪類」に関する同定は、朱子学(朱子鬼神論)と日本の妖怪観を混合した草稿本から理当地神道の影響を受け「カミ」を排除した刊本へ、と変化していった。こうした状況は、『和名抄』や『朱子語類』など書物と当時の社会認識(常識)を縫い合わせた知と理当地神道の知のせめぎ合いが、羅山の内でききていたことをも示している。

2.3 『多識編』刊行の背景とその受容

ところで、『多識編』の刊行は時代の要請を受けたものだといえる。本来儒者としての職分は儒学の教説を用いることで、社会や政治をよりよくしていくことである。一方、日本で求められた儒者の社会的権能は漢文の解説や筆算が可能なこと [7]、つまり中国の知識を日本に移入する媒介としての役割であった。

そして寛永期は出版事業が大きく発展する時期に当たり、当時は仏書の次に漢籍・医書が多く出版されていた [8]。また木版による訓点入り注釈書も多数刊行されており、特に重宝されていたのが羅山による訓点(道春点)であった。道春点は知の媒介者としての羅山を象徴する証左であり、その延長線上に難しい物品名に和名を当てる『多識編』の刊行を位置付けることができる。

こうして刊行された『多識編』は、『和名抄』と並ぶ本草学(名物学)の基礎文献として江戸時代を通じて重視された。例えば、寛文12年(1672)、貝原益軒が『本草綱目』に句読・訓点を施し『和名入本草綱目』として刊行した。これには附録として『本草綱目』所収品の和漢名対照表がついているが、それは刊本『多識編』で付けられた和名がそのまま使われている [9]。妖怪に則せば、寺島良安の『和漢三才図会』(1712年序)や新井白石の『鬼神論』など、刊本『多識編』の「怪類」に対する和名を基にしたと思しき記載を数多く見ることができる。

しかし、『多識編』の情報はそのまま鵜呑みされたわけではない。先に見た益軒編『和名入本草綱目』の附録として、別に「本草綱目品目」というものがあり、そこには「封か

はたらうと訓ず、未だ是非を知らず」[e]と『多識編』の「封」に関する同定(表1参照)に懐疑的であったことが窺える[10]。先達の知を批判的に継承していく、現在の学術研究でも見られる学術的姿勢が『多識編』をめぐる動向でも垣間見える。

2.4 羅山と仏教の妖怪をめぐる攻防

『多識編』の受容を、別の視点から考えてみたい。それは、仏教との関わりである。出世間や輪廻転生など仏教の教理は、理念的に儒学と相容れない。しかし、両者が結びつく場合があり、それこそが妖怪をめぐる動向であった。

そこで、「仏教怪異小説の嚆矢」[11]とされる『奇異雑談集』を取り上げる[12]。『奇異雑談集』は慶安元年(1648)頃以降に写本として成立し、貞享4年(1687)に刊行された(今回は写本を使用)。

写本下之四「姑獲の事」では、出産の際に死んだ女性に変化するウブメ(産女)に関する京都での出来事を紹介した後、

唐に姑獲といふは、日本の産女なり、姑獲は鳥なり[g]と続き、以下『本草(本草綱目か)』鳥部に載る「姑獲」の説明がなされる。

実は、この説も刊本『多識編』巻之四禽部第六にある姑獲鳥 今案うぶめどり、又云ぬえに基づいたものである。

これは『奇異雑談集』の編者(おそらく漢籍に通暁している高僧)が、羅山発信の情報を活用したことを指し、こうした箇所は他にも見られる。上之三「人の面に目鼻なくして、口、頂上に、ありて物をくふ事」は、羅山の『徒然草』注釈書『野槌』(1621年成立、1636年以前に刊行)第42段にある筑紫の医師一鶴宗閑が遭遇する怪異譚を、唱導僧に主人公を変えて改作したものである。

つまり『奇異雑談集』の編者は、『多識編』や『野槌』といった羅山発信の情報を自説へ積極的に「流用」(appropriation)[h]していることになる。こうした仏教が儒学者の説を流用する傾向は古く、虎関師鍊『元亨釈書』(1322年成立)巻30「智通論」にも見られる。

一方、羅山も自説の主張のために仏教怪異譚を利用して、中国の怪異譚の翻案した『恠談』が、それである。これは寛永年間末、三代将軍徳川家光が病床の折の慰め物として著したものである。

そのうち「頼省幹」を見てみる。出典は『説略』としているが、正確には『古今説海』「説略部」に収められた「談藪」であることを西田耕三氏が指摘している[13]。話の

概略は、以下の通りである。

頼省幹という鬼を祭祀する邪術を使う者がいた。頼省幹は鬼への生け贄に、一人の娘を攫った。娘の母は般若心経を常に読んでいたため、娘も陀羅尼の呪を読むことを忘れなかった。そしていよいよ生け贄にされそうになった時、娘が一心他念なく「掲諦、掲諦」と心経を唱えたところ、口から光が出てきて鬼を退治した。鬼の正体は大きな白蛇で、頼省幹は遠島に処された。一読する限り、読経の靈験によって鬼を退治する仏教色の濃い話である。しかし、その最後には、

凡そ、人の心一にして、真実の敬あれば、鬼神もおそるる道理あり、況や蛇蟒・ばけものの類をや、呪文によりて、しかるにはあらず、性理字義に此理を云り[i]とある。実は、この箇所は羅山の加筆である。鬼を退治できたのは仏教の靈験ではなく、陳北溪による朱子学解説書『性理字義』に載っているような心の徳性によるもの、というのである。つまり、仏教怪異譚に「真実の敬」という儒学の教えを付け加えることで、仏教の要素を否定し儒学の怪異譚として再編したのである。

次に「陰摩羅鬼」を見よう。これは『清尊録』に載る話で、崔嗣復という人が法堂で寝ていると黒い鶴のようなものに遭遇した。後に沙門に聞いたところ、蔵経に載る新しい屍の気が変じた陰摩羅鬼だと説明された、というものである。

これも蔵経すなわち『大蔵経』や沙門など、仏教色が濃い。しかし、「頼省幹」に対してこの話には羅山の加筆はない。何故かといえば、気が変じるといのは先に見た儒学(朱子学)の生成論と通じるものであり、また陰摩羅鬼について沙門は何の対応もしておらず、説明に終始している。つまりこの話は、加筆せずとも儒学的に解釈もでき、尚且つ怪異に何も対応できないという仏教への批判として読むことが可能なのである。以前、羅山が怪異を語る目的は、儒学の普及と仏教批判であると指摘したことがあったが[j]、『恠談』はそれを象徴する作品であった。

羅山の知識を積極的に受容し活用する『奇異雑談集』の編者(仏教)と、『恠談』で仏教怪異譚を儒学的に解釈する羅山。理念的には対立していても、怪異譚(妖怪)を媒介とすることで二者は対立だけではない側面も垣間見せている(そもそも羅山は仏教怪異譚を読んでいる)。こうした仏教と儒学の関係性は、当時の通俗的な思想だった三教(神・仏・儒)一致的な様相を表現しているともいえよう。

2.5 『恠談』その後

『恠談』は、元禄11年(1698)に『怪談全書』として刊行される。当初は将軍の慰め物(閉鎖的「知」)だったものが、世間に広く受容されるようになった(開放的「知」)

[e] 『益軒全集』6(益軒全集刊行部、1911)所収。

[f] 本小節および次小節の考察は、参考文献[12]拙稿2003による。

[g] 『奇異雑談集』は『仮名草子集成』21(東京堂出版、1998)による。

[h] 「我がものとしての利用」「領有」などとも呼ばれる、文化の受信者の能動的参加をいう。近藤和彦『民のモラル』(筑摩書房、2014)など参照のこと。

[i] 『恠談』は『仮名草子集成』12(東京堂出版、1991)による。

[j] 参考文献[12]拙稿2003。

ことを意味している。先程取り上げた「陰摩羅鬼」を事例にすれば、享保17年(1732)刊行の祐佐『太平百物語』には「西の京陰魔羅鬼の事」という話が載る。これは、本来中国の話である「陰摩羅鬼」を日本の話に翻案したものである(姿も黒い鶴だったのが、黒い鷺に変わっている)。そして安永8年(1779)、鳥山石燕『今昔画図続百鬼』巻之中に「陰摩羅鬼」の絵が描かれる(図1)。



図1 鳥山石燕『今昔画図続百鬼』「陰摩羅鬼」[k]

『太平百物語』だけでなく『今昔画図続百鬼』に記された解説も『清尊録』ではなく、『怪談全書』を参考にして創作したものと思われる。つまり、原著ではなく羅山がわかりやすく翻訳した情報を摂取することによって、自身の作品へ流用した。死してもなお、羅山は知の媒介者として活躍していたのである。

3. 妖怪図像から読み取る知識

羅山発信の情報は、さまざまな面で受容されてきた。その背景として出版文化の展開があり、その相互作用の結果は既に見てきた通りである。最後に、出版によって展開される知識を考えてみたい。それは、図像である。

寛永期以降、多くの書物が出版される中で、仮名草子などの作品には挿絵が描かれるようになった。文字が読めない人は、挿絵を通じて視覚的に作品を楽しむことができた。

挿絵には、妖怪も数多く描かれる。描かれた妖怪をいくつも見ていくと、共通点があるのに気付く。つまり、特定の妖怪を描く場合いくつかの約束事＝コードが存在している、ということである。言い換えれば、コードを見れば名前がなくとも何の妖怪か理解できることになる。こうした妖怪の図像コードも視覚化された知識だといえよう。

妖怪図像の例として、再度ウブメを取り上げる [1] [14]。

[k] 鳥山石燕の作品は全て『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』(角川書店,2005)による。

[1] 以下、ウブメ図像の考察は、参考文献 [14] 拙稿 2003 および 2013 による。

『奇異雑談集』でウブメから『多識編』の受容を見たが、『奇異雑談集』の段階では日本の産女と中国の姑獲(鳥)は類似した比較対象であって、同一視されたわけではなかった。しかし、これ以降同一視の道を辿る。それは、「姑獲鳥」に「うぶめ」のルビが振られることに端的に表れている(図2)。いずれにしる羅山の知識が、産女と姑獲鳥の同一視のきっかけを与えたのは間違いない。



図2 鳥山石燕『画図百鬼夜行』「姑獲鳥」

そうしたウブメ図像の基本的なフォーマットは、腰蓑状の線描がある白装束を着た女性である(赤子は絶対条件ではない)。白装束は死を、腰蓑状の線描は出産による出血を意味しているが、最初からこのフォーマットがあったわけではない。ウブメ図像の先駆である『せんみつはなし』(寛文年間頃成立)を見ると、点描のある装束つまり経帷子を着て、腰から下はスカート状に塗りつぶされている。ここから白装束や線描は、経帷子や塗りつぶしを簡略化したものだと考えられる。こうして腰に線描があり白装束を着ている女性を見さえすれば、読者はそれをウブメだと認識できたのである。

このフォーマットを基礎に、別のコードを追加することで、さらなる意味を持たせる事例がいくつもある。今回は三つのコードを見てみる。

第一に、顔に手を当てて杖をついている図像である(図3・4)。これは『地藏菩薩発心因縁十王経』を絵画化した、いわゆる『十王図』の「中有の旅」をモチーフにしていると考えられる。中有すなわち四十九日の間、暗闇の中(此岸と彼岸の間)を彷徨う死者の魂を意味している。また杖をつかないと歩けない＝滂沱の涙で前が見えないほど、悲しみに暮れていることを表現しているとも考えられる。

第二に、鳥の部位である(図5・6)。これは、もちろん姑獲鳥のコードである。当時のウブメ認識はあくまでも産女＝女性の姿であって、姑獲鳥は後発の情報、つまり羅山発信の情報以後のものだったことを意味している。

第三に、流れ灌頂である(図2)。流れ灌頂とは、川辺

に棚を作り、梵字が書かれた布を張って、柄杓を添え、通りかかった人に水をかけてもらう風習である。17世紀の『因果物語』(片仮名本)では異常死をした者全般を弔う供養法として書かれているが、18世紀を過ぎると出産で死んだ女性の供養として特化される傾向にあり、図2の『画図百鬼夜行』(1776年刊)以来、ウブメの背景としてよく描かれるようになる。



図3 富尾似船編『宿直草』(1677年刊) [m]



図4 山岡元隣・元恕編『古今百物語評判』(1886年刊)

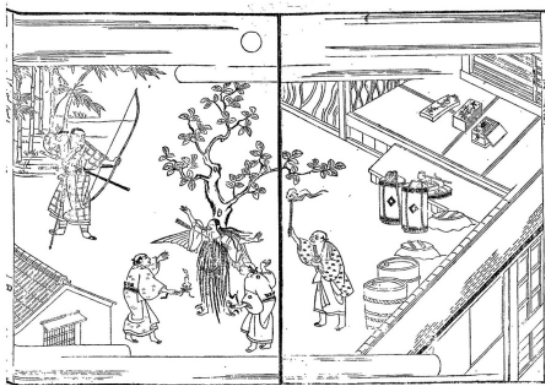


図5 苗村松軒『御伽人形』(1705年刊)

[m] 図3~5は『西鶴と浮世草子研究』2(笠間書院, 2007) 附録 CD-ROMの画像による。



図6 苗村丈伯『世話用文章』(1692年刊) [n]

以上、ウブメを事例に、特定の妖怪を認識するためのコード(属性)を検討した。注意すべきなのは、一度使われただけではコード化つまり一般化されないということだ。多くの絵師がある部位や背景を何度も踏襲することで、次第にコードとして認知されていくのである。

踏襲という点では、絵巻でも同様のことがいえる。「ぬらりひょん」や「わいら」などの妖怪が描かれた狩野派系の妖怪絵巻、いわゆる『化物づくし絵巻』が、各地の博物館などで展示されているのは、絵師が画風の修練のために絵巻を写してきたからである。

この『化物づくし絵巻』を版本として出版したのが、鳥山石燕の『画図百鬼夜行』である[15]。図2も挿絵のコードの反映ではなく、『化物づくし絵巻』を基に描かれている。しかし図2の流れ灌頂が後継のウブメ図像コードに影響を与えているように、挿絵と(版本化した)絵巻との相乗効果が窺える[o]。

4. おわりに

本稿は、林羅山を軸にした妖怪と情報・知識の関係から検討を始め、さらに図像コード分析にまで敷衍させた。羅山の知識を基に発信された情報が受容した者の新たな知識へと体系化されていくように、情報と知識は発信と受容の間で絶えず循環している。

ただし留意すべきは、発信する羅山の思惑(儒学や理当心地神道などの主張)を超えて、受容する側は情報をさまざまに解釈し利用していることである。羅山の意図と異なる理解は誤解だが、それによって文化の新たな局面が拓けてくる。そのような連続・非連続な状況を経て、近世の妖怪文化は展開していく。その背景として、出版という見知らぬ不特定多数の対象を相手にしたメディア展開との密接

[n] 図6は『近世文学資料類従 参考文献編9 世話用文章』(勉誠社, 1976)による。

[o] 付喪神などが描かれる土佐派の『百鬼夜行絵巻』も、明和7年(1770)刊の版本『狂画苑』に収録されている(アダム・カバット『江戸の化物』岩波書店, 2014)。このような絵巻の版本化によって、絵巻という限られた「知」が公開されていったことは注目に値する。また石燕は『画図百鬼夜行』のシリーズの中で、『百鬼夜行絵巻』の妖怪も描いており、狩野派と土佐派の妖怪が同一線上に並んでいるのは、興味深い。

な関係があった。

近世の妖怪は、メディア展開との相乗効果によって広がっていったのである。

参考文献

- [1] 拙稿「化物」(東アジア怪異学会編『怪異学入門』岩田書院, 2012).
- [2] ピーター・パーク『知識の社会史』(新曜社, 2004).
- [3] 藤實久美子『近世書籍文化論』(吉川弘文館, 2006).
- [4] 拙稿「林羅山によるかみの名物—『多識編』をもとに—」(『日本研究』47, 2013).
- [5] 三浦國雄「鬼神論」(『朱子と気と身体』平凡社, 1997).
- [6] 若尾政希「享保～天明期の社会と文化」(大石学編『日本の時代史』16, 吉川弘文館, 2003).
- [7] 黒住真「儒学と近世日本社会」(『岩波講座日本通史』13, 岩波書店, 1994).
- [8] 橋口侯之介『和本入門』(平凡社, 2011).
- [9] 拙稿「近世の怪異と知識人—近世前期の儒者を中心に—」(一柳廣孝ほか編『妖怪は繁殖する』青弓社, 2006).
- [10] 拙稿「『河童史料』論—一人が河童を記録する営み—」(国立歴史民俗博物館・常光徹編『河童とはなにか』岩田書院, 2014).
- [11] 堤邦彦「近世の説話 仏教怪異譚の系譜」(『時代別日本文学史事典 近世編』東京堂出版, 1997).
- [12] 拙稿「林羅山と怪異」(東アジア怪異学会編『怪異学の技法』臨川書店, 2003).
- [13] 『怪異の入口』(森話社, 2013).
- [14] 拙稿「うぶめの系譜—描かれたうぶめ」(『怪』vol.0014, 角川書店, 2003)・「歴史的産物としての「妖怪」—ウブメを例にして」(小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造』せりか書房, 2010).
- [15] 香川雅信『江戸の妖怪革命』(角川書店, 2013).